

第 1 回沖縄感性・文化産業研究会議事録

日 時	平成 22 年 8 月 26 日 (木) 14:00 ~ 16:30
場 所	内閣府沖縄総合事務局 2 階 D・E 会議室
出席者	<p>座 長 富川 盛武 (沖縄国際大学 学長) (敬称略)</p> <p>委 員 大盛 伸二 (株式会社 RBC ビジョン 取締役)</p> <p>” 大城 玲子 (沖縄県観光商工部 新産業振興課長) 代理</p> <p>” 久万田 晋 (沖縄県立芸術大学付属研究所 教授)</p> <p>” 下地 寛 (沖縄県文化環境部 部長)</p> <p>” 仲川 和宏 (株式会社よしもとラフ&ピース 代表取締役社長)</p> <p>” 長嶺 栄子 (株式会社かりゆしエンターテイメント 代表取締役社長)</p> <p>” ミゲール・ダルーズ (株式会社沖縄メディア企画 経営企画部長)</p> <p>プレジデント 平田 大一 (一般社団法人 T A O F a c t o r y 代表理事)</p> <p>オブザーバー 勝山 潔 (内閣府沖縄総合事務局 運輸部長)</p> <p>山内 徹 (内閣府沖縄総合事務局 経済産業部長)</p> <p>事務局 野原 広邦 (内閣府沖縄総合事務局 運輸部企画室 観光振興官)</p> <p>” 仲宗根君枝 (内閣府沖縄総合事務局 経済産業部 商務通商課長)</p> <p>” 小渡 勲 (内閣府沖縄総合事務局 経済産業部 商務通商課 課長補佐)</p> <p>” 山口 一 (内閣府沖縄総合事務局 経済産業部 商務通商課 商務係長)</p> <p>” 上原 綾乃 (内閣府沖縄総合事務局 経済産業部 商務通商課 通商第一係)</p> <p>” 屋良 直樹 (株式会社開発計画研究所 研究員)</p>
配布資料	<p>[資料 1] 沖縄感性・文化産業研究会の設置について</p> <p>[資料 2] 沖縄感性・文化産業研究会委員名簿</p> <p>[資料 3] 新成長戦略を踏まえた沖縄感性・文化産業の位置づけ</p> <p>[資料 4 - 1] 沖縄文化の産業化に向けて (沖縄県資料)</p> <p>[資料 4 - 2] 文化資源活用型観光モデル構築事業について (沖縄県資料)</p> <p>[資料 5] 文化資源を活かした Hyper Local Contents 感動読谷山 2010 他 (平田大一氏資料)</p> <p>[資料 6] 沖縄感性・文化産業研究会の検討の方向性 (案)</p> <p>[資料 7] 沖縄感性・文化産業の構築に向けた今後の進め方 (案)</p> <p>[参考資料 1] 国内外における文化産業構築に向けた取り組み</p> <p>[参考資料 2] 文化産業立国に向けて</p> <p>[参考資料 3] 沖縄地域経済産業ビジョン - 中間報告 -</p> <p>[参考資料 4] 沖縄地域における観光立国の実現に向けた官民懇話会 - とりまとめ -</p>

1．開 会（略）

2．あいさつ（略）

3．研究会の委員紹介（資料2）(略)

4．座長選出

事務局より富川委員を推薦し、全会一致で決定。

5．議 事

- (1) 研究会の趣旨説明（仲宗根課長より資料1、資料3に基づき説明）
- (2) 文化産業立国に向けて（仲宗根課長より参考資料2に基づき説明）
- (3) 沖縄県の取り組み（大城委員代理より資料4に基づき説明）
- (4) 感性の産業化について（平田氏よりプレゼンテーション）

成功事例ということで肝高の阿麻和利を取り上げていただいて感謝しているが、私自身は、立ち上げから11年かかってやっと皆さんに認知されるようになったというのが正直な思いである。沖縄の文化の産業化に対する思いがやっと追いついてきたのかなという感想を持っている。肝高の阿麻和利は、最初の3年間は沖縄総合事務局から資金の応援をいただいたが、4年目からは自主財源に移行し、今は一切の補助をいただかずに年間5千万円ぐらいの運営を行っている。これをどう実現してきたのかということについては細くなるので今日は中身のお話はできないが、一点言えることは、補助金など国・県・市からの応援は、スタートダッシュをする段階では非常にありがたい支えであるが、その支えを感謝こそすれ当てにしていけないということを自覚しておかないと、応援が得られなくなったらやらなくなるということでは、観光客に訴えかけるだけのコンテンツは絶対に生まれてこないということである。

コンテンツを生み出していく中での課題はいくつかあるが、その一つは、一律みんなこうでなくてはいけないということを踏み超えて、自分たちだけの世界観をいかに作り出して行けるかということであり、そのための環境を作っていくことである。肝高の阿麻和利では、今はまだ体力がないから市から無料で稽古場を貸してもらっているが、将来的には稽古場も含めてお金を払っていかないといけないと思っている。そして、最終的にはホールをいかに活用するかということがテーマとなってくる。公共ホールの有効活用については全国的に問題になっているが、私は2001年からホールの館長を務めていたときから、自分達のホールは自分達で守るということを考えて取り組んできた。団体公演は一般的に800人以上の集客が採算ラインとされており、収容力がそれを下回るホールは団体が借りに来ない。500名のホールでは採算ラインに乗らないので、阿麻和利という看板舞台をつくって、自分達でホールを借りてくれる団体をつくった。肝高の阿麻和利を立ち上げる上で、拠点があったことは大きかったと思う。

市町村合併でうるま市になると、一つの地域にホールが3つあるという事態になった。500人ホール、800人ホール、1000人ホールとすべてホールとしての性格が違うのだが、結局それらをまとめて同じような形で運営していくということになり、小さなホールはあ

まり活用されないということが出てきた。そのような中で肝高ブランドを立ち上げていくことの必要性を感じ、今、もずくギョウザになっているが、漁業組合と産業課と商工会と一緒にになって取り組もうと呼びかけて話し合った。しかしこれが、ホールの館長のやることではないということで波紋を呼んだ。私は文化オンリーでは絶対に産業化は難しいと思っている。文化はいろいろなものをつながってこそ力を発揮するものである。今回、肝高の阿麻和利という舞台を11年間やってきてやっとブランディングできた。今度は、阿麻和利という作品にある付加価値を活かして、例えば取り組み方に付加価値をつけるとか、子供達自身に付加価値がついているとか、着物や衣装に付加価値がついているとか、そういうふうに広がっていかないといけない。私はこれを「感動体験型産業」(略して「感動産業」と呼んでいる。沖縄に観光にくる人達は感動体験型産業に触れる。そしてその中の一つに文化的な舞台がある。自分達の文化は世界に通用するという自信と自覚を持つとともに、それを観光客にさらけ出すときには覚悟が必要である。その覚悟とは、観光客は非常に水物であって自分達の好みでどんどん変わっていくから、そのさらに上をいく感性で臨んでいかなければならないということである。そうでなければ文化産業と言っても疲弊していくだけのものになるのではないか。そのモデルケースを肝高の阿麻和利という舞台でやっていこうと思っている。

資料の中に、「文化資源を活かした Hyper Local Contents」というのがあるが、これは全部手書きで作っている。なぜパワーポイントではないかと言うと、地域の人達はパワーポイントで配られた瞬間にこれは自分達がやるものではない、彼等がやってくれると思ってしまう。この部分から地域の人達に迫っていかねば、一緒に参画したやり方はできない。つまり、地域の人達は自分達がわくわくしないと参加してくれないのである。こうやります、こういうふうに決まりましたという形で入ると、絶対にそれは成功しないと思う。

この企画の内容は、まず舞台があって、次に2時間の舞台には収まらない細かい情報を含めたコンテンツをコミックにしてウェブマガジンとして配信していく。コミックは吹き出しの言葉を換えるだけで世界の人達に通じるという特長がある。それによって沖縄の歴史に触れてもらう入り口を作る。また、主題歌PV、舞台アーカイブなどをネットで配信するVOD (Video On Demand) にも展開していく。このライブ(舞台)とコミックとVODに関しては、イベント会社やエージェントができることであるが、一番最後の Local Goods が一番大事なところで、地域の人達が自分達の文化を誇りにする意識がなければこれらの取組は根を持ってなくなる。私が地域に入って、いろいろな外の人と地域をつなげるプロデューサーの役割をする意義がここにある。

地域にある文化資源、ローカリティあふれる感性を現代的に活かしていけるような取組をしていかない限り、世界に通用するものはできない。世界が広がっていけばいくほど、地域のオリジナリティが強くなってはいけないということ、海外公演をする中で実感した。自分達の地域にある伝統芸能をもっとクローズアップして、それに磨きをかける。古いものを大事にしながら、それを新しいカルチャーとして、ニュートラディショナルとして表に出していく。その中で課題となるのは、古いものと新しいものの関係性だと思う。現代版組踊が果たせる役割は、伝統的な組踊の入り口まで連れて行くことだと思っている。そして、伝統的なものも新しい現代的なものを積極的に組み込んで、さらに生命力を豊か

にしていく。それこそが伝統的なものの力強さだと思っている。そういう相乗効果を生み出せるような関係で行かなければいけないと思っている。

肝高の阿麻和利だけではなく、今、沖縄県内で7ヶ所、8つの舞台を作っている。地域にある物語をクローズアップして大きくしていくことで、沖縄全体で現代版組踊が演じられているような形にしていきたい。自分達の地域に誇りを持っている所に人は集まってくる。逆に、自信を持って文化を発信していない所には人は集まってこない。青年会のエイサーでも、自分達のエイサーに誇りを持っている所は人気が高い。この「誇り高い」というところにキーワードがあると思うので、今回の研究会の中ではその部分も取り込んで討議していただけたらありがたいと思う。

(5) 沖縄感性・文化産業研究会の検討の方向性等(事務局より資料6に基づき説明)

富川座長 文化についてはややもすると文化政策の議論に傾いていく可能性があるのですが、この研究会ではあくまでその産業化に焦点を絞っていただきたい。その検討の方向性として、事務局から3つの新機軸、ケーススタディとしては3つの題材が提案された。先に説明のあった国の文化産業立国の取組、県の取組、平田さんの現場の取組も含めて、自在な切り口で結構なので、何なりとご質問、ご意見があれば出していただいて、議論を進められればと思う。

平田氏 肝高の阿麻和利がケーススタディに取り上げられているが、ケーススタディの意味を教えてください。

仲宗根課長 事例として勉強させていただき、その要点を他の取組にも転嫁させていきたい。

平田氏 代表的な作品として肝高の阿麻和利があるが、私自身は、肝高の阿麻和利は2012年3月には次世代に引き継ぐということで、その準備をしている。できれば肝高の阿麻和利を含めて現代版組踊というジャンルとして、地域でやっている舞台づくりの全体を見てもらった方がよいと思う。阿麻和利はその一つの成果であり、その基には肝高メソッドという取り組み方がある。阿麻和利はショーとして見るだけでなく、取り組み方自体に付加価値がついていて、そこにお客さんがずっと来てくれているということがあるので、文化の産業化というテーマを考えるケーススタディではその点にも着目していただきたい。

富川座長 ショービジネスとしての可能性ということで、平田さんの取り組まれている現代版組踊が本格的に産業化して、海外展開していくようなモデルになれるかという視点から検証していきたいと思っているので、よろしくをお願いします。

大盛委員 肝高の阿麻和利について、それをやろうと思ってきむたかホールに言ったのか、それともそこにいったからその地域の歴史を題材とした舞台を作ったのか、どちらなのか。

平田氏 今のような展開になることは当時の私も含めて誰も想像していなかったと思う。ただ補助金や支援金に頼るだけでなく、自分達で活動や事業を継続していくために考えないといけないということが、結果的に、グッズを作るなどブランディングを図っていくという展開になっている。今年からは県の文化資源の予算をいただいて、稽古風景を商品として見せていくバックステージツアーを手がけようと動いている。その都度どうしたらいいのかという考え方の中で決めてきたことであり、そういう臨機応変に対応できるということも重要なポイントだと思う。

大盛委員 現在、読谷村でやっているのはなぜか。

平田氏 東海岸に肝高の阿麻和利という舞台がある。私達は勝手にそれを東の横綱として、それに対する西の横綱をつくるということで読谷に拠点を構えて尚巴志を中心とした舞台づくりに取り組んでいる。8月12日に大阪と東京で公演を行ってきたが、そこには阿麻和利を昨年見た方が大勢来ていた。県外公演も所詮は沖縄に来てもらうためのキャラバン公演と私達は位置づけている。それを通じて琉球の歴史に触れることで、今までとは違う沖縄観光の新しい動きになればよいという思いがある。読谷には、阿麻和利のお墓、尚巴志のお墓もあるし、赤犬子という人もいたというように、物語をつくる上で関連性があるからその場所を選んだ。逆に言うと、物事を起こしていくときにはそういうストーリーが重要だと思う。そこに関わる子供達が、自分達は単に集まったのではなくて、そのストーリーや歴史の中に位置づけられているという思いを持つことで、自分達の地域に誇りを持って舞台に立つ姿が生まれ、それが劇団四季や宝塚とは違う感動を生む大きな理由になっていると思う。

下地委員 今回の平田さんの話で、地域の活性化や文化の産業化という視点でのケーススタディのイメージが湧いてきた。ご紹介のあった勝連や読谷での取組、場合によっては石垣島でもオヤケアカハチの物語を地域で現代的に作り上げていくということも考えられる。一方、空手はどういう形で産業化していくというイメージを持っているのか。県の文化資源活用型観光モデル構築事業では、今ある琉球芸能や文化、スポーツ 空手もその一つだと思うが、それをどういう形で観光の資源として活用して、芸能や文化が自立して自分でお金を稼いで循環していくことができるかということが切り口となっている。その面で肝高の阿麻和利は成功例であり、それをモデルとしているいろいろな取組に当てはめて、そういう事例をたくさん作っていかうという議論が県庁内で始まっているが、今回の研究会では、そういった取組に加えて、それをコンテンツとして発信していかうという所に方向性があるように感じているが、事務局の考えはどうなのか。

山内部長 これは新成長戦略に基づくものなので、一義的には所得が向上していく、産業として大きくなっていくことを目指していきたい。それに加えて、地域の活性化という視点もきわめて重要で、大企業が稼ぎを生み出すというモデルが崩れていく中で、かえって沖縄の方が地域に根づいた伝統文化などが新しい収入源になっていくモデルになるのではないかと思っている。今までは輸出型企業がモノを海外に売って稼ぐということと地域の活性化は切り離されて別の世界の話であったが、これからは関係省庁が連携しながら、地域資源をうまく活用して地域の活性化を図るとともに、やはり稼がないといけないため、それを海外に売っていくということに力を入れていく。沖縄には地域資源としてさまざまな文化や伝統芸能があるから、それを当然観光資源として活用して地域活性化を図るとともに、コンテンツとしてアジアに配信していくという方向性がある。

ケースとしてこの3つを選んだ中で、琉神マブヤーは、コンテンツとしてアジアなど海外に展開していくという考えを畠中社長がしっかりと持っているから、明らかにコンテンツ主導型のものである。平田さんの現代版組踊は、最初から海外に発信するというよりは、まず地域を活性化していくという自立的なモデル、あるいはソーシャルビジネス、コミュニティビジネス的なものだと思う。問題は空手であり、どこに焦点を置いて検討していくかということは議論が相当必要であるが、端的に言えば、世界で空手人口が5千万人ぐらいいいて、その多くを占める海外の人達が沖縄に対して最近関心を持っているという話を聞

いており、そういった所をうまく活用しない手はないのではないかとということである。同時に地域の活性化としても、青少年育成や中高年の健康づくりという点で成功している事例なので、地域の活性化も海外展開も両方可行なのではないかと期待している。しかし一方で、政策の対象としてやっていけるかということについては相当ケアをしていかないといけないとも思う。海外展開という点では相当ポテンシャルを持っていると思っており、ある意味、野心的な試みである。

下地委員 空手については、沖縄は発祥地として世界に知れ渡っており、そこに来て勉強したいという人達に対する受入体制を作ればよい。ところが、沖縄の芸能や芝居は海外ではあまり知られておらず、伝統的な文化や芸能を継承して保存するとともに、そこから売れるものを作り出して情報発信しないといけない。そのままでも世界に情報が通じていて海外から人が来るものと、逆に沖縄から情報発信して海外から人を呼ぶものといった二つの切り口があるのではないかと。そこを分けながら方向性を出した方がよいと思う。

久万田委員 芸能という言葉を考えてときに分けないといけないのが、ショービジネスとしての芸能という意味と、パフォーマンスアートとしての芸能という意味である。つまり、お客さんから入場料を取って舞台で見せるというショービジネスとして成立しているものと、そうでないものがあるということである。例えば、空手は、そもそも入場料を取ってやっていないという最初の形があるわけで、そこにはさまざまなコンテクストがある。その文化の中でどういう網目に絡まっていて、どういう意味が付与されているのかということがある。そのコンテクストを無視してコンテンツを売り出すと、いろいろな齟齬が生じてくると思う。空手は流派が多く、一つの統一団体にするのも難しい状況にある中で、国際競技化するときにはどうするかという問題がある。エイサーの例で言うと、エイサーはもともと地域の伝統行事であったが、1950年代からコンクールが始まったのを契機に、地元以外の地域以外でも見せるパフォーマンスとして展開していった。しかし今でも地域の芸能だという片足は保っている。その一方で、1980年代から琉球国祭り太鼓のような、イベントを中心に一年中活動し、県外でも国外でもいろいろな所に出て行くような新しい団体が出てきた。現在、観光客を含め県外の方の大多数は、エイサーというと琉球国祭り太鼓のような形をイメージしている。そうすると青年会エイサーにも観光客など見る側から創作的なものが求められてくる。青年会の中でもそれに対応する団体もあるが、エイサーのあり方をめぐって葛藤が生じている。創作的なエイサーと青年会のエイサーは考え方の原理やコンテクストがまったく違う。それを一つの産業化ということによってやっていくといろいろな問題が出てくる。このように、一つの地域文化が普遍化・世界化していくと、当然元のままではいられなくなる。ところが元のは、平田さんから「地域の誇り」というお話があったが、「地域の誇り」の意識がなければ本家本元ではありえない。今回の研究会で取り上げる空手も、もともとのコンテクスト、脈絡をもった文化に産業という付加価値をつけてやっていくときには当然葛藤が生じる。沖縄の地域文化を世界化していくときには当然価値観の対立が生まれてくる。その対立をどう考えるかということは、私たち文化を研究する側の問題で、あまり産業化を考える方は関心がないかもしれないが、当事者の方々はこうしたことには大変敏感である。だから空手の関係者に対しても、その辺のニュアンスをよく汲み取ってやっていかないと、産業化・世界化していこうといってもそんな訳にはいかないということが起こりそうだという気がする。産業化に後ろ向きの発言がかもしれ

ないが、そういう側面もあるということである。

富川座長 文化の産業化においては、一つは伝統文化をどう守るかという文化政策の領域と、それを超えてビジネス化できるかという境目の部分を整理しないといけないと思う。

長嶺委員 平田さんのお話でも地域を活性化する上で拠点があることの重要性が指摘されていたが、私も芸能者にとって踊る拠点があるということは、これから産業につなげていくためには重要だと思う。いま私どもの会社では900名近くの芸能者を登録している。そして彼女・彼等の踊る拠点の一つとして、毎日、恩納村のホテルで琉球芸能を披露している。そこは芸能者にとっての営業の場にもなって、そこでの引き合いから彼女・彼等の芸能を披露する場を増やしていつている。そういう中で、拠点づくりが地域であることも確かだが、毎日芸能が見られるホテルも拠点になるといいなというのが私の希望である。それがまた地域の文化に行く一つの入り口だとも思う。芸能を見てもらって、もっと真髄に触れたいというふうに思ったら、それが国立劇場につながったり、平田さんの所につながったりするのが、ホテルの役割なのかなと思っている。

エイサーについては、いま創作エイサーが県内に150団体ほどあり、私どもの方に登録している。昨年、伝統エイサーを見せるイベントを行ったが、観光客には創作エイサーのようなアクティブな踊りが受け入れられるようで、伝統エイサーを一週間披露したところ観光客のニーズとのギャップが目立った。そのようなことがあって今年はその企画をやめている。ということから、伝統エイサーと創作エイサーをコラボするということは、私はまったく考えなくていいと思っている。今回のエイサーコンクールでも県外の方々がどれくらい集まるのかとても楽しみにしているが、全国のエイサーと本場沖縄のエイサー、創作エイサーと伝統エイサーをつなげるような面白い仕掛けをつくれれば、もっと人は集まるのではないかと思う。青年会エイサーの方の話聞いても、創作エイサーを全否定しているわけではなく、創作エイサーが本物の古典のエイサーを見に来る人の入り口になればいいという考え方を持っている。伝統と新しい芸能は相反するものではなく行く道があると思う。フラダンスは日本全国で100万人の愛好者を抱えると言われており、その多くが本場のハワイにフラダンスを見に行ったり、踊りに行ったりしている。フラダンスにも古典と現代があるが、あれだけ発展して日本にも大きな愛好者人口を作っているということを見ると、エイサーにもそういう可能性はかなりあるのかなと思う。それを検証してもらえればありがたい。

富川座長 組踊にしても、エイサーにしても、空手にしても伝統文化というコアの部分は当然重要だと思うが、それを認めた上で次の展開に行くということが本研究会のねらいである。ビジネス風に解釈すればコア・コンピタンス、すなわち他に打ち勝つ核になるものがあればビジネス化できるということであると思う。空手の中にもコア・コンピタンスというのがあって、世界中からそのスピリットを求められているということだと思うが、そういう要素が組踊やエイサーなどの文化的素材にもあるかどうか、平田さんにお聞きした。伝統文化なので守るべき大切なものがあるが、それをビジネスに展開するためにどうすればいいのか。例えば、組踊が本土に行って言葉が分からなくても理解してもらえるのであれば、たぶん外国でもできるだろう。その突破ができればビジネス化が進むと思うが、どうだろうか。

平田氏 結論から言うと、(沖縄文化の)エンターテインメント化、商業化は十分できると思う

が、その時に覚悟が必要となる。久万田先生が言われたようないろいろなぶつかり合いが出てくるが、それ自体が生きている文化としての息吹だから、私はいろいろな議論が交わされることはよいことだと思う。沖縄の文化を産業化するという大きな目で見たとときに、例えばいまや夏の風物詩の一つになっている各地のエイサー大会も最近できてきたものであるように、変わっていくものはきっとある。その変わっていくものに足踏みをしすぎると、産業化の議論だけをして、結局は何も形に残らないということになるのではないか。それよりは、伝統的なものは伝統的なものとしてしっかりと位置づけながら、新しい伝統的なものをつくるというような感覚で取り組んでいくことが重要かと思う。地域性を意識した取組がその中の一つだと言ったのは、沖縄らしさを考えたからである。肝高の阿麻和利は、商業興行としての劇団四季や宝塚の後追いをせず、戦略的に地域を拠点として沖縄らしさを出している。また、きむたかホールは、子供達が地域を知るための場所としてホールを戦略的に位置づけていくことで、他のホールとの違いを出している。芸能文化はただ見せるだけではダメで、客の気持ちをつかまえて引き込んでいく司会者、演出家が必要である。観光のポイントが観光ガイドで決まるように、演出的な要素を加えた見せ方をしていけば、伝統的なものでもその良さを失わない形で見せることは可能だと思う。そういった戦略とそれを実現していく力を持った人材を作っていかなければいけない。また、そうした人材が作った筋書きを演じるプレーヤーが必要になるが、今のところそれに関しては可能性があると思うので、沖縄文化のエンターテインメント化は十分可能性があると思っている。

富川座長 守るべき伝統文化とそれをもっと産業として展開していく方法について議論が進んでいるが、ここでエンターテインメントビジネスのエキスパートである仲川委員にもご意見をお伺いしたい。

仲川委員 吉本興業グループで沖縄国際映画祭という大きなイベントを、内閣府沖縄総合事務局、沖縄県、自治体の皆様にご協力いただいて進めており、その中で沖縄にしかない魅力あるコンテンツをいくつも見せてもらって、なるほどなと納得するところが多い。いま議論にあった沖縄の文化と芸能の線引きの難しさについては、真剣に考えないといけな部分が多いと実感しているが、大阪でも東京でもすべての都市が抱えているのと同じ問題がここに発生していると理解している。当社の本拠地であり、上方文化の中心地である大阪でも、国内・海外の観光客ばなれが大きく進行している。これを打破するには、地域・場所の文化、伝統、芸能といった資源をいかに外部に有効に発信して、観光客など市場に向けて理解させていくかが重要となる。沖縄でも、そういう発信力、プロモーション力について提言として方向づけなければいけないのではないかと感じている。もう一つ、文化と産業化の例で、大阪では漫才と上方落語の関係がある。上方落語は伝統芸能に位置づけられているものではあるが、沖縄のエイサーの例と比べて一つ違うのは、これは芸能でありもともとが産業であるということである。伝統エイサーは地域に根づく文化であって芸能ではない。芸能はあくまでお金を皆様からいただいてそれを生活の糧にするというものであり、そうであるからこそそこにショービジネスが成立する地盤がある。沖縄の文化について、ショービジネスとして成り立たせる、または伝統文化として守っていくという線を引きべきなのか、あるいはどこまで守ってそこから何を生み出せるのかということとは、この研究会の提言としてまとめると、県内の芸能者の指針になるし、彼等の理解・協力を

得られると思う。なおかつ、そこから抽出したものがショービジネスとして外に発信していける、コンテンツとして形を作るための材料ができるのではないかと感じている。

文化を産業として位置づけた場合には、当然、収益を将来的にあげて黒字になってもらわないと困る。そのためのスタートダッシュとして公的助成は非常に有用である。特に沖縄は産業基盤として資本力という問題がどうしても出てくるため、最初の弾みをつけるために公的助成をしていくシステムがあるというのは非常に重要なことである。ちなみに沖縄国際映画祭のような形態の事業は、これを継続して維持・発展させるには相当の運営経費がかかるため、どうしてもある程度の公的支援が継続的に必要になってくる。事業を継続することで経済波及効果を及ぼすことができるし、その中で人材育成や雇用など何らかの効果を生み出すこともできるのではないかと感じている。これは我々の例であるが、県内外のそうした意思をもっている民間事業者が社団法人や NPO 法人も含めていると思うので、何らかの公的支援をしていくことによって、沖縄県の経済活性化に有効に結びつくものがあるのかもしれない。

地域の伝統文化を守る、あるいは掘り起こすための方策に関して、第2回映画祭で、北谷町の皆さんと吉本興業が地域発信型の映画製作を行い、映画祭で上映を行った。そういった地域の皆さんと結びついた形で何かをつくるということも試みとしてあり得るのではないと思う。つくることによって発信するためのコンテンツができ上がるので、それを有効に活用するという方法もあるのかなと感じている。地域産業振興の施策とも密着する形で、そのエリアにある観光資源や伝統的な文化の魅力を映像という形にして外に出していくことができるという可能性もあるので、こういったものも一つの事例として考えていただければと思う。

富川座長 ミゲール委員は NPO 法人沖縄空手道・古武道支援センターにも関わっておられたが、ご意見をお伺いしたい。

ミゲール委員 NPO 法人沖縄空手道・古武道支援センターには1年間関わって情報発信をしていたが、今は関わっていない。今日は外国人としての意見を述べようと思っている。まず沖縄文化が外に行くには、ニーズは何なのかということが問題である。一昨日、旧盆で沖縄市の街をブラブラしてエイサーを見て回ったが、私以外の外国人は一人しかいなかった。嘉手納基地のすぐ隣なのに誰もいない。彼等が興味がないのか、それとも必要とされるエイサーは伝統ではなくてもっと活発なものなのか。そのマーケティングをどういうふうにしていくか。外に持って行くのであればそれをしっかりやらないと、沖縄文化はすばらしいと自分達で思っているも外国人はそうは思わない。彼等が望む文化、必要な芸能を持っていくのが大事ではないかと思う。最近、中学生が作った「ヤギの冒険」という映画があるが、これをカンヌ映画祭に持っていきこうということで、私はフランス語の字幕作成で関わった。海外に出すのはすばらしいことだが、そのまま字幕を作っても、その意味を伝えなければ海外の人はまったく意味が分からない。ヤギを食べるなんてフランス人にとっては理解できないことである。それを伝えるには久万田先生の話にあったコンテクストが大事である。だけどそれを映画では伝えられないからそのままにしておこうということになると、持っていったとしてもまったくフランス人の理解や関心は得られず、一人も沖縄を訪れることはないだろう。沖縄に今ある美しさがうまく伝わっていないのである。何のために何をどういうふうで紹介するのが重要なことである。

沖縄空手通信というにニュースレターを出している関係で、銀行やホテルなどいろいろな所から空手の演武を頼まれるが、そう簡単な話ではない。空手界は固い。空手界だけでなく文化人全体は、お金を儲けるためではなく、文化を継承・発展しようとしている。だから彼等がやろうとするものと、ホテルに来る人が見たいものは違う。無形文化財の大先生の演武を見せたとしたら、空手を分かる人間であればこれはすばらしいものだと思われるが、空手を分からない人間がいくら見てもそのすばらしさは分からない。その価値を買ってもらおうようにするために、誰が何をどういうふうにするかという、マーケティングがいちばん大事だと思う。

資料の中で2点だけ指摘したい。参考資料2の中でクール・コリア、クール・ジャパンと来て、今度はクール・オキナワなのか。もっと面白いネーミングはないのか。韓国が上海、ベトナムで成功しているというのは、予めそのマーケットを調べた上でそこにいれるから入ったのではないか。どのマーケットをターゲットとするか、そのマーケットを調べた上でそこにアタックする。例えば空手人口5千万人という数字は私は信用していないが、例えば2千万人いたとしても、アメリカの空手マーケットとヨーロッパの空手マーケットは全然違うものである。アメリカはショー的な派手なものが好きで、それはヨーロッパではありえない。フランスをはじめヨーロッパの80%は本土系の空手である。沖縄伝統空手とはまた違う。その人達に何を売っていくかということが一番大事である。それがマーケティングではないかと思う。

文化の産業化で金沢市の事例が出ていたが、絹の文化・伝統があって、美術館を拠点に事業を起こしてそれを新産業にしている。沖縄でも伝統を守りながら新しい若い世代を作っていく、それが産業ではないかと思っている。空手でも映像でもエイサーでもそういうプロデューサーを育てることが重要である。一回モデル事業をやって終わりではなくて、継続性のある事業をつくっていくと、それが沖縄にきちんと根づいて外に出て行けるのではないかと思う。それは外国なのか、本土のリピーターなのか。本土のリピーターは最初は沖縄の普通の観光客だが、その次はもっと深い文化を見たいのではないかと思う。中国に注目しているようだが、中国のマーケットは沖縄の文化に興味はないと思う。メインプレイスに入っている中国人はいるが、国立劇場に入っている中国の団体客は見たことはない。それではなく、県外でも海外でもリピーターをターゲットにしたものをつくるのが、文化産業にはとても重要ではないかと思う。

富川座長 伝統文化とマーケティングの折り合いをどうつけるかということは、次回以降の研究会で深めていきたいと思う。

(6) 今後の進め方(事務局より資料7に基づき説明)

次回の研究会は10月上旬を予定しており、その日程は改めて各委員と調整させていただきたい。

6. 閉会(略)